

作品を読みながら、こうして言葉にされることによって触れることのできるものが、この世界にはまだまだたくさん潜んでいるのだと改めて驚きと喜びを感じました。

空の果てってこれなんだろう  
一時間早く着いたあたしだけの丘 豊富 瑞歩（茨城県）

予定の時間より「一時間早く着いた」。それだけのことでも、世界は別の姿を見せてくれる。

病室で  
薄紫の寝間着が  
時折薄い灰色にも見えた  
あれが  
祖母の最後の夏だった 春町 美月（大阪府）

寝間着の色に自分の気持ちが映しだされています。「最後の夏」になるのなら、もっと違う夏を過ごしてほしかった、過ごさせてあげたかったという胸に沈めた祖母への思いが抑制された筆致によっていっそう強く伝わってきます。

もうずっと  
歪んだガードレール下に  
ある花束を眺めている うずたろう（埼玉県）

誰かの人生が突然断ち切られた場所、その誰かを哀悼する人がいるということ、そしてその「花束を眺めている」語り手。語り手は無念の思いを抱く靈魂とも読めますが、通りすがりの人物が、見ず知らずの誰かの死を悼み、思いを深めているのかもしれない。誰も他の人の人生を生きることにはできない。でも誰かの人生に起こったことはたまたま自分に起こっていないだけかもしれないと。語り手を「ずっと」立ち止まらせた思いが、この詩のなかに読者を立ち止まらせます。

令和期の魑魅魍魎は人でなく  
ロマンチックを食べて生きてる ベロニカ（神奈川県）

コンビニの二十四時間営業の  
ちいさい鯖びを食べている鶴 うずたろう（埼玉県）

うずたろうさんの作品の「鵺」はトラツグミの別名ではなく、伝説の妖怪の「鵺」だと読みました。ベロニカさんの作品の「令和期の魑魅魍魎」は「ロマンチック」を、うずたろうさんの作品では、闇が排除された都市の「鵺」が「ちいさい錆び」を食べて生き延びている。（「錆び」の響きが「さびしい」も連れてきます。）

「ロマンチック」「ちいさい錆び」という言葉の選択にはおかしみがあって、どちらの作品からも物の怪に対する恐ろしさよりもどこか親しみがわいてきました。

わたくしは  
殺されました  
朝の陽で  
お前らだって正気ではない

鍋島小骨（北海道）

「わたくし」という丁寧な言葉からの「お前ら」という乱暴な呼びかけの落差に意表を突かれました。また、「朝の陽」の持つイメージを覆されます。攻撃的な言葉の裏に、追い詰められたような痛みとともに自分をとりまく世界への違和感に挑もうとする思いも感じられました。

ひぐらしの声に濡れ  
夕闇を  
りりり、と泳ぐ  
深緑の夜まで

春町 美月（大阪府）

世界の美しさだけを抽出したような佇まいの作品。「りりり」のオノマトペもひぐらしの声を「濡れ」という皮膚感覚であらわしているところも印象に残ります。眠りの世界のようにもあの世とこの世の境い目を行き来しているかのようにも響いてきます。

一言で切られた

マスクングテープが  
おろおろと支えてくれた

風船（東京都）

「一言で切られ」というショッキングな出来事に対して登場するマスクングテープ。貼ってもすぐに剥せるあの頼りなさで懸命に支えようとしてくれる「おろおろ」具合が  
いとおいしい。

真夏の飛び石連休  
裸足じゃ踏めない熱い石  
陽炎の向こうに海はない

茶和鈴（東京都）

海があれば「熱い石」を裸足で踏んでもすぐに冷やすことができるものを。裸足となって身も心も解放されたいのに、そうできない閉塞感が伝わってきます。

燃やせない  
私の書いた本  
土にも還らず  
静かに  
あなたを指差す

カワサキシヨウタ（静岡県）

「燃やせ」ず「土にも還ら」ない「私の書いた本」。言葉を紡ぐことに対する強い意志によるものだろうか。戦時下に強制的に燃やされた書物のことを思うと、「あなたを指差す」が、未来への願いのように心に残りました。

じめったい  
子宮の痛み振りほどき  
東京タワーを抱きとめたい

藤ほたる（神奈川県）

「じめったい」。説得力のある身体感覚ですね。身体を突き抜け、<私>が世界へ広がってゆくかのような勢いが頼もしい。

ぞっくりと並ぶ剥製月の雨

鎌倉まくら（宮城県）

「ぞっくり」という言葉から、並んだ剥製の痛ましさが伝わってきます。人間の手による容赦のない死の姿。「月の雨」は季語としての働きよりも、その透明度によって「剥製」への祈りのように響いてきました。

母国語を呪文のように呟いたあと  
日本語で言う ダイジョウブ

まちりこ（埼玉県）

「呪文のよう」な母国語の呟きに、本当は「ダイジョウブ」なんかではないことが伺えます。聞き逃してしまいそうなこのような呟きを聴きとれる耳を持っていないければならないのだと思います。

自転車に桜花びらついていて僕に  
はさびしいやわらかい だった

永井 貴志（京都府）

言葉のぎこちなさに惹かれました。自転車に桜の花びらがついていたのを見たときの実感がそのまま差し込んでいるかのようです。心をひらいて見なければ桜の花びらを気に留めることはできない。感受する心がみずみずしく豊かな世界へ連れていってくれます。

九月の作品も楽しみにしています。